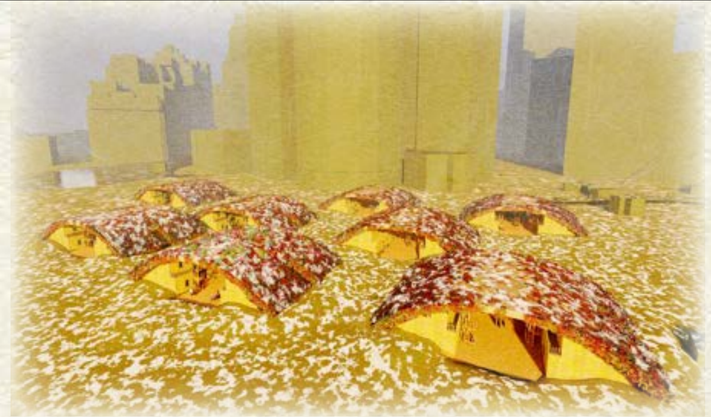
作品名	新種のヴァナキュラー建築 生活様式による帰納的建築から新時代への昇華	作品番号	1/5
校名	大阪電気通信大学		
氏名	高橋　侑里		

Evo CASE-07



Evo CASE-03

Evo CASE-08

Evo CASE-04

新種のヴァナキュラー建築

～生活様式による帰納的建築から新時代への昇華～

Evo CASE-01

Evo CASE-05

Evo CASE-02

Evo CASE-06

作品名	新種のヴァナキュラー建築 生活様式による帰納的建築から新時代への昇華	作品番号	2/5
校名	大阪電気通信大学		
氏名	高橋　侑里		

01.ヴァナキュラー建築 定義

ヴァナキュラー建築とは広義ではさまざまな解釈の仕方ができる。
一般にはその土地にある建築、つまり現代の高層建築であっても風土建築ということができる。

本研究ではその都市に昔から伝わる建築、またその土地の大地や気候、宗教など風土を含んだものと定義する。
また伝統的建築物を構成する地形や景観もヴァナキュラー建築の付加要素として定義する。

ヴァナキュラー建築はその地ごとの生活文化に由来し、各地固有のアイデンティティを持っている。

02. メガシティから美的景観へ（平準化）

今後も人口増加により、都市が増加し、メガシティがさらに多く誕生することであろう。そして大都市の象徴となる超高層建築物が無作為に建てられる。その結果、どの都市も高層建築物で溢れかえりそれぞれの地域ごとのアイデンティティは失われる。

Scenery of New York

ニューヨークとパリの景観について比較すると、ニューヨークは高層建築物で街を形成した結果、街に隙間となる空間を生み出せず、どの場所から空を見ても高層建築群の連続である。
一方、パリの景観はランドマークとなる高層建築物がいくつかあり、他はおおよそ建物規制で平準化することで美しい街を創造している。

Scenery of Paris

したがって都市を立体的でなく、平面的に拡大していくことで景観を損なわずアイデンティティを守ることになるであろう。つまり一極集中の都市でなく機能を分散配置することが重要である。
これは『村の形成』に近似しており、本能的性質である。

都市の高層化により失われつつある人類が築いてきた文化や文明そしてアイデンティティ。現代都市においてかつての本能的性質を還元する必要がある。
これは超高層建築の時代に対するアンチテーゼである。

03. 実験都市ニューヨーク

計画敷地はニューヨーク（マンハッタン島）とした。
マンハッタンの摩天楼や超過密都市から、ニューヨークは世界に誇るメガシティであり、本論で示す超高層の現代都市である。

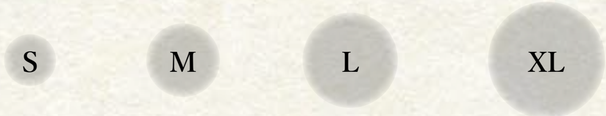
かつて「過密文化の集約」の“実験都市”に用いたニューヨーク。
今回再びニューヨークを「新種のヴァナキュラー建築発祥」のための“実験都市”として複数のプロトタイプを計画する。
つまり新たなヴァナキュラー建築のプロトタイプはメガシティの超過密を解決し、都市全体の低層化及び、平準化をはかり、超高層建築物を侵食するように導く。

またアメリカ合衆国は移民を多く抱え、多民族国家が形成され現在と過去で以下のように俗称された。

現在：「人種のサラダボウル」　→単に異なる文化が集約
過去：「人種の坩堝」　→文化や人種が複合共存

これからの都市の在り方として、単に文化を集約するのではなく過去の形態に立ち返り、文化・人種が都市に複合共存できるように計画する必要がある。

04.『S, M, L, XL ＋』に見る都市と建築のスケール



ヴァナキュラー建築　近代建築　高層建築　超高層建築

『S, M, L, XL ＋』は建築や都市を様々なスケールによって定義したものである。
時代の変化と共に建築は多くの様式を生み出した。そして大量消費の時代を迎え、人口の増加に伴い「過密の文化」は我々人間の暮らしを変容せざるおえなくなった。

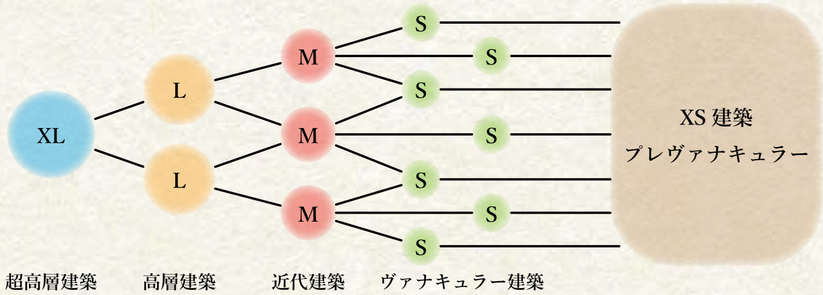
都市的なスケールにおいて、最小の「村」から「都市」と大きく広がり、現代の都市の「ビッグネス」が確立された。つまり大きいことは究極であると言うことだ。都市の大きさに比例し、建築も大きくなる。そしてその兆候は経済をも新しいものへ提起する形だ。ビッグネスは超越的な建築であり、基準階平面の発生を契機に今や現代の建築の様相ともなり得ている事実である。

しかしビッグネスの集積はアイデンティティを剝ぐという事実の元に成り立っている。それは１つの都市であっても基準階平面が生み出すものにアイデンティティは付随していないということである。

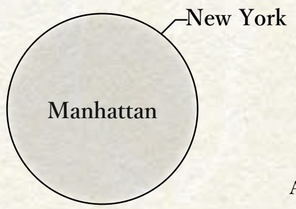
05. 建築のスケールと風土建築への回帰

現代の XL 建築（超高層）が完成するまでには、S, M, L 建築を経た軌跡が存在する。都市的なスケールにおいて、最小を「村」とすると近代になるにつれ、そのポリスは「町」そして「都市」と大きく広がる。そして現代の建築の様相はアイデンティティを剝ぐという事実の元に成り立っている。

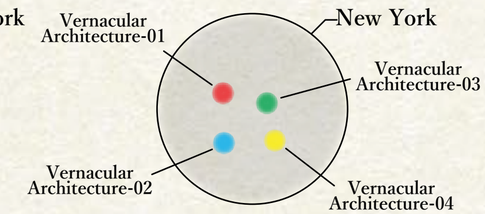
そこでこれからの都市・建築において過去の建築に回帰する必要がある。その中で我々の最も本質的な生活様式は S 建築（ヴァナキュラー建築）に見られると考えられる。しかし新たな様式を創造するためには、S 建築以前の暮らしを顧み見る必要がある。それは S 建築よりももっと自由で自然的、本能的なものである。
それが“XS 建築（プレヴァナキュラー建築）”である。



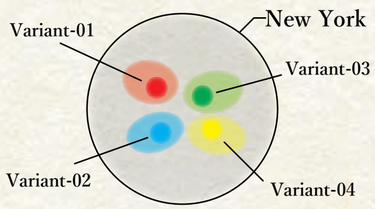
06. 新種のヴァナキュラー建築と都市の拡がり



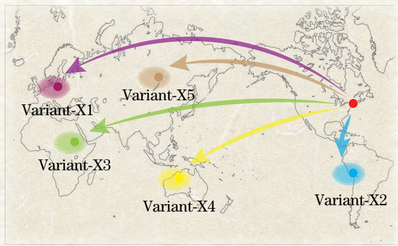
①N.Y. を新たな実験都市として計画



②N.Y. 各ブロックに新たなヴァナキュラー建築を形成配置

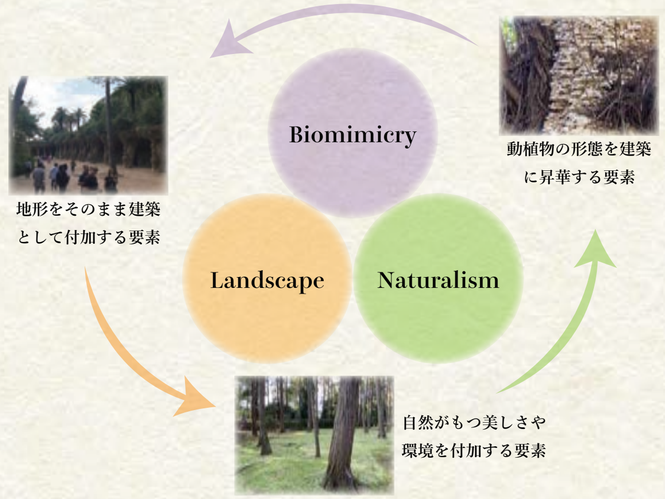


③ヴァナキュラー建築の増殖、異種株の発展



④変異体となり各都市に伝染、発展その後、更なる変異体として伝染

07. 新たなヴァナキュラー建築の可能性



ヴァナキュラー建築はその土地ごとの風土にあった建築であるが、新たなヴァナキュラー建築は将来的にどの土地で発展していくかは不確定である。
また現超高層の時代において、ヴァナキュラー建築が淘汰されたとすると、新たなヴァナキュラー建築は自然的な要素を加える必要がある。それは単なる材料、構法、意匠だけではない。
多種多様な現代、それらの建築自身が保有する生活様式も含む必要性が生じる。

踏襲するヴァナキュラー建築において、それぞれの生活様式が新たに誕生するヴァナキュラー建築に含まれなければならない。それは建築の表層的なものではなく、人間の精神や生活感に建築が語りかけるものである。

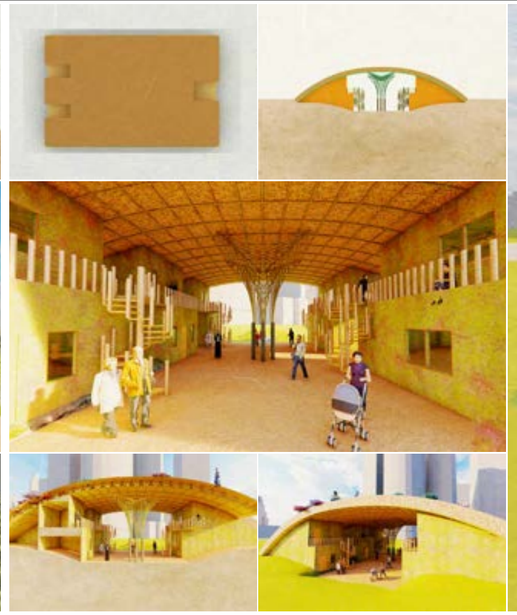
作品名	新種のヴァナキュラー建築 生活様式による帰納的建築から新時代への昇華	作品番号	3/5
校名	大阪電気通信大学		
氏名	高橋　侑里		

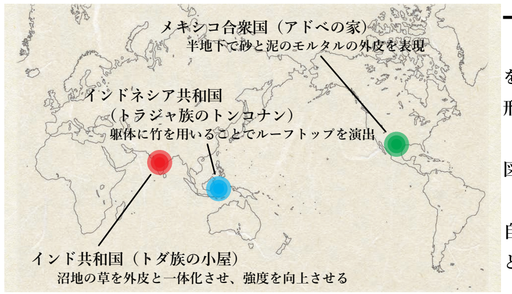
CASE-01

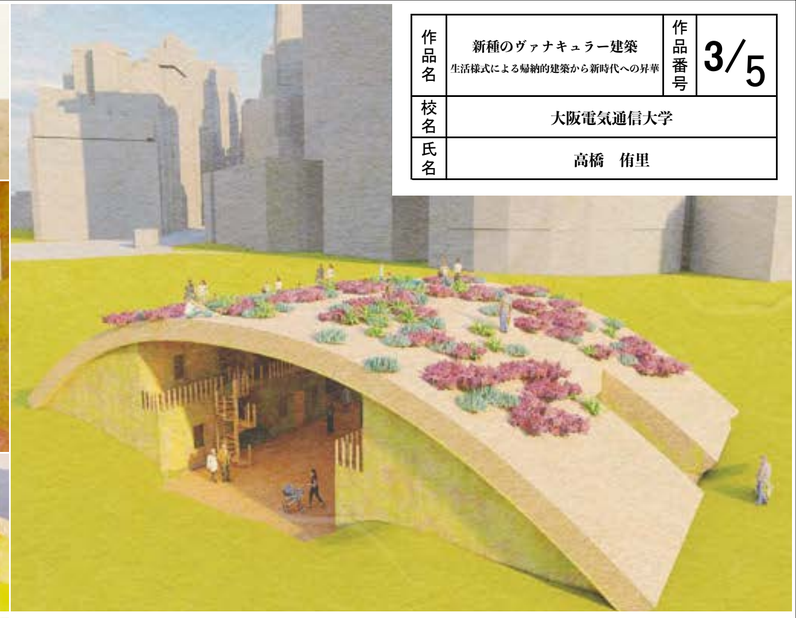
塔状の建築を中心として、モノコックの岩石群がそれにまとわりつくような形状となっている。岩石群は登ったり、隙間に入ったりでき、２種類の造形を結ぶ広いレールラインがこの建築を多次元的に演出し、集合住宅とコミュニティースペースを一体化した様相をなす。

武陵源の岩石風景を踏襲し、既存の建築に自然の形態を合わせたような建築である。またコミュニティスペースとなるレールラインが『キノコ』の傘を表現し、バイオミミクリーとすることで、どこか我々人間が自然と一体化するような効果も生む。

この形態は都市では見られない自然が生み出したような、新たな景観でヴァナキュラー建築と都市、自然を結びつける。





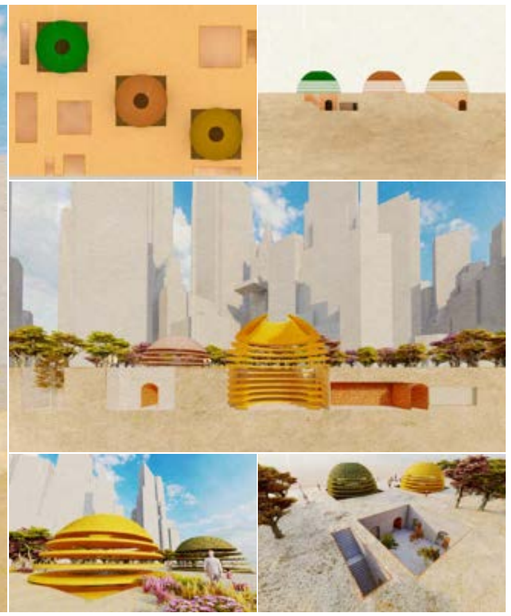


CASE-03

この建築は地形と一体化するような形態をしている。建築を構成する中で「アドベの家」の構造を元に半地下にし、乾燥した泥や石をアドベのモルタルとして構造を計画した。また躯体を竹で形成し、モルタルに草を加え全体の強度を向上させた。

ルーフトップを人々が行き交うことのできる公園とすることで、住居とコミュニティの一体化を図った。また都市との繋がりから内部は商店街の体をなし、商いのできる空間を計画した。

全体を自然材料とすることで環境に配慮した建築となっており、メンテナンスを数年に一度住人自らが行うことでヴァナキュラー建築再起が測れ、都市街区の中でも伝統住居の共存を実現することができる。

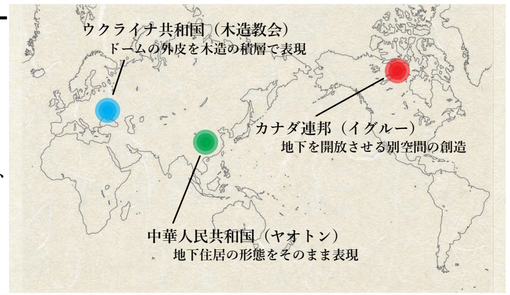


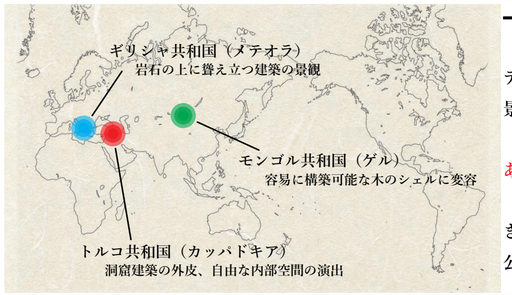
CASE-02

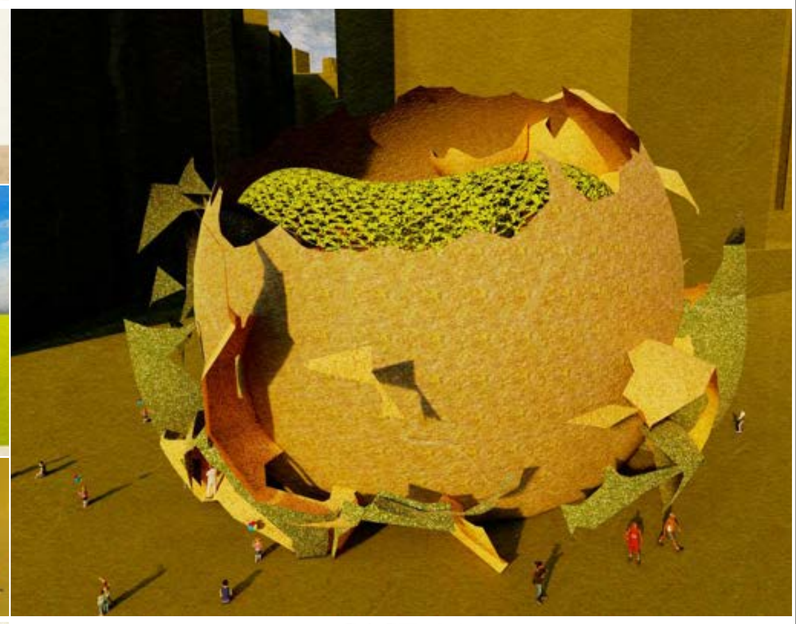
中国のヴァナキュラー建築（ヤオトン）をベースとした、地下住居を計画した。砂や泥、そして石を基本とする中、新たな空間演出のため木造のドームを創造した。この木造のドームは地下の暗い空間において公共スペースに空間的開放を与えるだけでなく温かみや採光・換気を与える。

ヤオトンは一つの公共スペースから複数の住居にアクセスするものが多いが、コミュニティーごとには繋がりがないので、『アリの巣』をバイオミミクリーとして全ての住戸を公共スペースを介し、繋がるようにトータルコーディネートした。

大都市において、公共スペースは各所に増えてきている中、「隙間」となる空間がほとんどないのでこの地下住居によって都市と住居を繋げる、屋内、屋外そして半屋外を演出した。







CASE-04

「カッパドキア」の形態から岩の中に住居空間を創造し、屋上の空間は木造のシェルでコミュニティ空間を演出した。全体的な外観は「メテオラ」のような体をなし、都市であっても自然的な景観を損なうことなく自然主義な建築を生み出す。

全体の構造はモノコック構造となっており、外観も『卵の殻』のようにし、自然と建築が一体であるような様相とした。

高層建築からの開放とこの建築から見える景色とのコントラストにより、人々が簡単に出入りできる展望空間を創造した。外部、内部をスケルトン・インフィルとすることで集合住宅だけでなく、公共施設にも変容することができる。

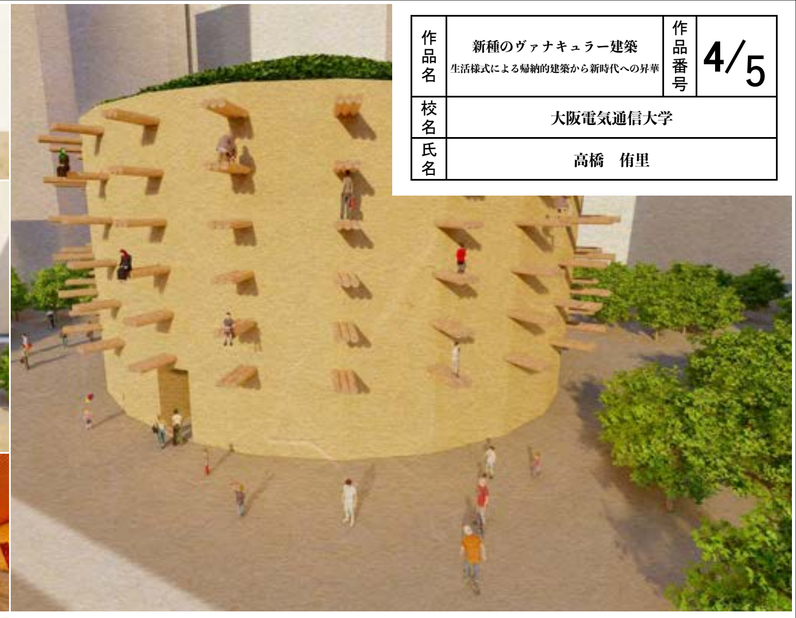
作品名	新種のヴァナキュラー建築 生活様式による帰納的建築から新時代への昇華	作品番号	4/5
校名	大阪電気通信大学		
氏名	高橋　侑里		

CASE-05

この建築は「ガンビエの杭状集落」を元に計画した。円状に人工地盤を形成し、その上にさまざまな色彩の石造の集落を配置した。水上にあって色鮮やかな住居が景観にアクセントを与え、人工地盤は海の波に合わせて起伏の生じる形態とした。住居内は簡単なレイアウトとなっており、厚い石造が内部空間を静穏にしている。

付加要素として『グレート・バリア・リーフ』のランドスケープ、海中を浮遊する『クラゲ』のバイオミミクリーを建築の様相としてその形態を演出した。

都市化に伴い、建築のアイデンティティが失われていく中、海上に生命感のある建築を配置することで都市に自然を昇華するような景観を生み出す建築となる。



CASE-07

この建築の全体構成は中華人民共和国の「福建土楼」を元に構築した。外壁は泥や砂、石などを練り合わせたものなので、メンテナンスが可能なように、マリ共和国の「ジェンネの大モスク」のような木造の足場を壁に配置する。そして日射遮蔽となる屋根には「コゾレック」の草の屋根を用い、単純に日射遮蔽するだけでなく、緑に囲まれた穏やかで涼しみのある空間を創造した。

土楼の構造上、外部は閉鎖的であり、内部は開放的であるが、住人自らのメンテナンスができるように外部に動きを加えることで都市に開放的な効果を付随させる。また屋根を自然的で柔らかなものにすることで、内部空間をより一層開放的にすることができる。

都市と一定の距離をおきながら、都市に開放的な様相をもったヴァナキュラー建築である。

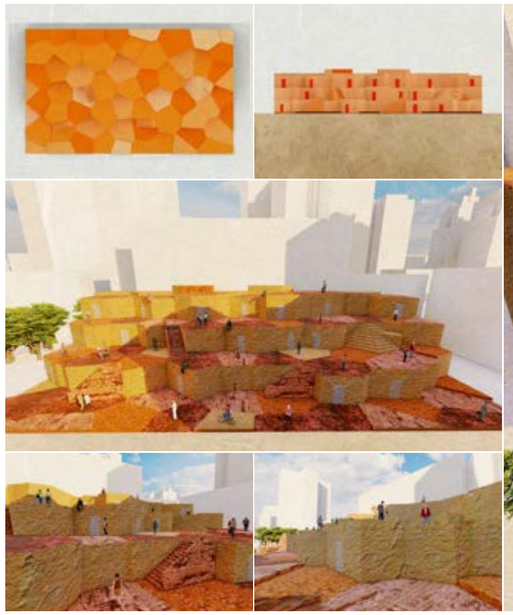
CASE-06

この建築はコミュニティスペースを住居に付随させた建築である。起伏する丘はその地に根差したランドスケープをなしており、自然と一体化した空間を生み出す。

丘から突出した「ウィンドキャッチャー」は内部の空気環境を整えることに止まらず、一続きの景観から人を対流させるポイントを生む。

また外壁は「黒い家」から石で小石と砂を挟む形となっており、暖かい内部空間を生み出す。ゆえに自然材料でパッシブハウスを実現させた建築である。

形態の様相としては『カメの甲羅』をバイオミミクリーとして付加することで強靭な丘を生み出し、景観からも自然的な建築を生み出した。



CASE-08

この建築は「ブラジルの不法占拠地区」や「パンディアガラの断崖」のようにどこか自然発生的である。階段状に不規則に配置された岩石群に住居を形成していき、無法的な集合住宅が生まれる。内部は洞窟建築として規格の許す限り、自由なレイアウトが可能である。

全体の景観としては「アルベロベッロ」のようにほぼ同規格の建築が連続して並び、自然発生的であるがどこか美的景観を感じさせるような建築となっている。

この建築は終わりがないので、縦横無尽にどんどんと形成することが可能であり、メタボリズム建築の典型ということができる。建築も人間も自由に広がりを見せることで自然と一体となって成長するような様相が画一される。

作品名	新種のヴァナキュラー建築 生活様式による帰納的建築から新時代への昇華	作品番号	5/5
校名	大阪電気通信大学		
氏名	高橋　侑里		

Evo CASE-08

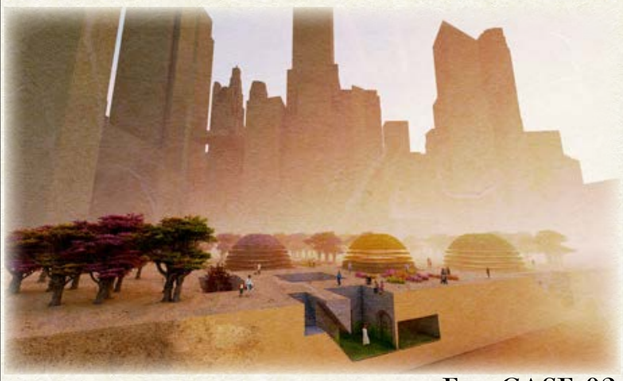
Evo CASE-07

Evo CASE-04

Evo CASE-03

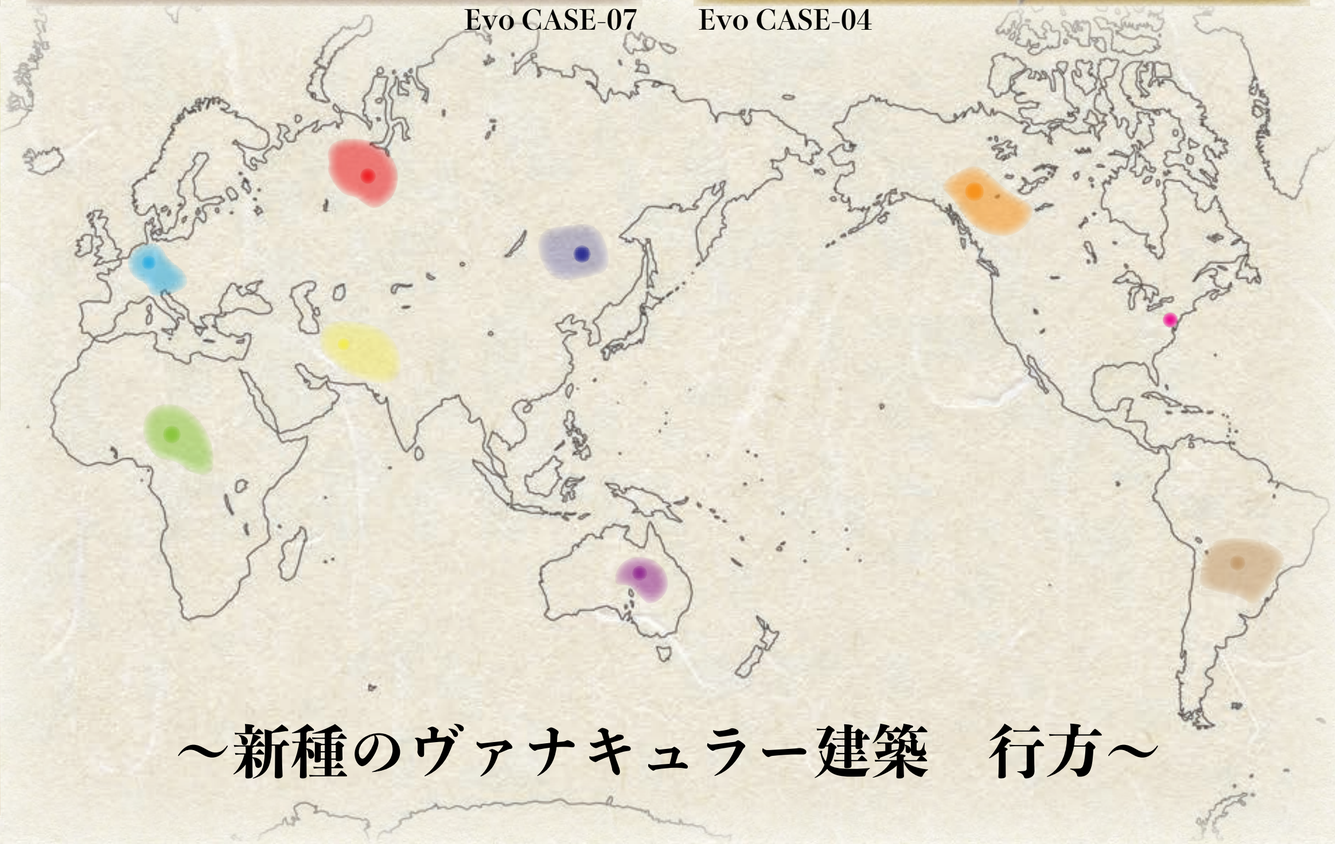
Evo CASE-01

Evo CASE-05



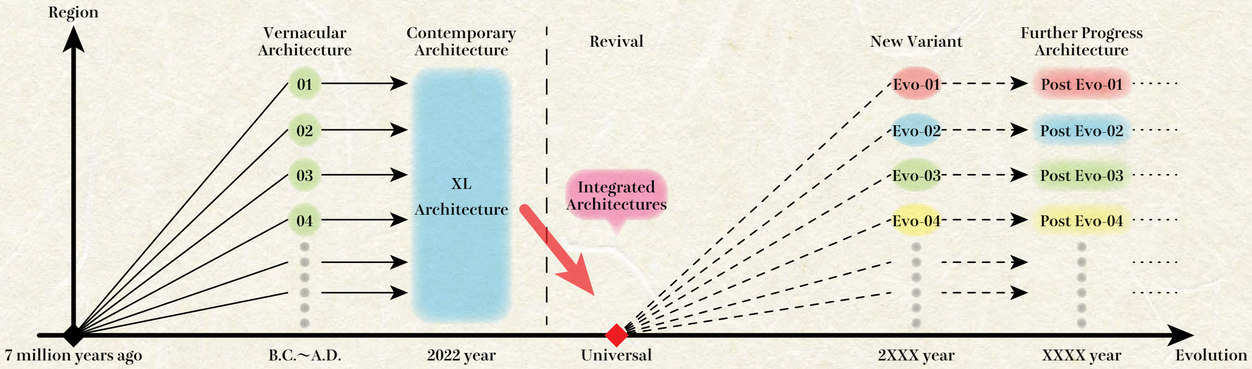
Evo CASE-02

Evo CASE-06



～新種のヴァナキュラー建築　行方～

08. 建築進化論と未来



◆Reflect on Nature from Orient Architectures

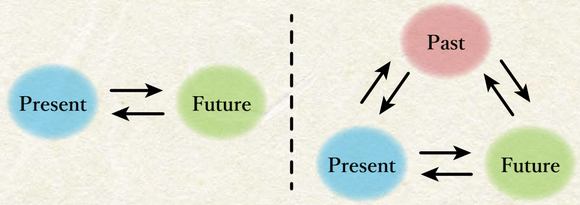
人類は 700 万年前にアフリカで誕生した。その後様々な地域に移動し、個体を増やし文明を繁栄させてきた。それとともに人類は各地固有のヴァナキュラー建築を築いてきた。しかしヴァナキュラー建築は自然に由来するため、現代文明では淘汰された。超高層建築の時代を迎えたのだ。

さて自然に叛き、アイデンティティを失ってしまった建築の先にはどのような未来があるのか。

「人類・建築・都市」の未来において、現代の超高層建築の文明には限界がある。これからの建築の文明を築くにあたり、再び過去の建築、つまりヴァナキュラー建築を踏襲することが新たな種の建築を生み出すことになるであろう。
そこでニューヨークを実験都市としたユニバーサルである起点をゼロ地点とする。ここで生み出されるヴァナキュラー建築を踏襲した建築は、細胞の分子体のように各地に拡散し、さらにその地で変異種となり、続けて同様に拡散・発展する働きをする。

これは人類が今まで大陸を渡り、建築・文明を変遷してきた働きである。また変遷する流れは自然摂理に由来するものである。このように原初の建築から自然を顧み、新たな建築を生み出すことは、現代建築の抱える問題からの開放を示す。

09.ヴァナキュラー建築の様式と未来



これからの時代では過去、現在そして未来全てを繋げて考える必要がある。全ての歴史に学ぶことが新たな未来の可能性を生むであろう。

また工業化以降の近代建築はどれも規格に縛られており、自然から逸脱してしまった。人の手が加えられたことで、環境が建築に無意識に造られ発展していくことがなくなった。

そこで建築そのものが自然発生的に共同体を形成していくことがこれから必要となってくるであろう。その手がかりは過去の建築・文化を顧みることであり、それはヴァナキュラー建築である。
ゆえにヴァナキュラー建築はこれからの様相に必要なものである。